

日英同時通訳の技術的障害とその克服
— APECフィリピン会議橋本首相記者会見の同時通訳の分析を通して

小倉慶郎（近畿大学）

I. はじめに

小倉（1997）の研究論文では、英→日同時通訳の問題点を探った。本論では、その逆の日→英同時通訳の技術的、語彙レベルでの問題点と処理法を、1996年11月25日NHK「7時のニュース」で放映された、APECフィリピン会議直後の橋本首相記者会見をもとに、具体例に則し実証的に論じたい。

日英同時通訳に関しての主要な先行研究として、Nishio（1986）、水野（1995）が挙げられるが、一般に英日、日英を問わず同時通訳研究においては、実例に密着した実証的研究に乏しいきらいがあり、経験からのみ語られたり、あるいは欧米での研究理論を鵜呑みにしただけのもの、すでに評価の定まっている言語学・心理学の分野の一材料として扱われるケースも多い。

現場での実例に基づいた実証的研究に乏しい理由のひとつに、会議通訳者の守秘義務の問題がある。これが、自ら、あるいは他者の行った同時通訳プロセスを、入念に分析し、公表する妨げとなっている。¹⁾ また、万が一、会議通訳の実例の録音と許可が手に入っても、会議通訳では原稿が事前に通訳者の手に入ることも多く、同時通訳のプロセスが明らかになるとは限らない。また、speechのあとの質疑応答の同時通訳であれば、原稿はないが、speakerが考えながらしゃべるために、redundancyが多く、入念に練られたspeechの同時通訳ほどの難しさはない。それゆえに、同時通訳のプロセスが現れにくいと言える。

したがって、守秘義務の絡まない公共放送でon the airされたもので、しかもvoice over（時差通訳）ではないほぼ生同通と考えられるもの、通訳者に原稿が手に入らないものを素材に扱いたいと考えた。さらに、あまり明晰にしゃべらない、one sentenceの長い政治家のスピーチが、難度が高いがゆえに、日英同時通訳のプロセスが浮き彫りになり、実証的研究には適していると考えられた。その点で、APECフィリピン会議直後の「7時のニュース」で放映された、橋本首相記者会見は、最適なプロセス分析の機会となった。²⁾

II. 日英同時通訳に特有の問題点

具体例を見る前に、まず日英同時通訳プロセスにおける、いくつかの問題点、障害を指摘したい。

① 論理構造の相違による問題

欧米人と日本人の論理の違いは、一から十まで言わないでも意志が疎通し得るlow-

context culture と入念な言語表現を必要とする high-context culture の違いから生ずると言う説はよく知られている。このほかにも、レンガを一つ一つ積み上げるがごとき欧米の「線的論理」に対して、論理を飛躍し、間の論理は聞き手に埋めてもらう「点的論理」を日本人は使うという説もある（外山 1973）。いずれにせよ同時通訳の現場では、この high-context culture から来る論理、ないし「点的論理」に悩まされることも多い。関西を代表する同時通訳者でもある船山の書いた論文(1985)にも、会議通訳では「私は、このような問題に関して、私なりに、できるだけ慎重に、まあ他人が見れば、…」というような言い回しは珍しくないと言う記述がある。このあいまいな言い回しは、特に、responseの速い、前倒しの訳出をする同時通訳者にとっては、大きな障害となることがある。会議通訳の現場で、speaker が「A氏は、コウレイですが…」と言ったのを、間髪を入れず 'Mr. A is old.' と訳してしまい、すぐに「高齢」ではなく、「恒例」だったと気づいたが後の祭りであったという笑うに笑えない実話もある。

②「ハ」と「ガ」の問題

「ハ」は必ずしも、「ガ」のように主格を表すのではなく、しばしば主題を表すことは久野(1973)他でも指摘されていることである。池上(1981)では、「ハ」の主題化、場所を設定する役割として次の例を挙げている。「象は鼻が長い」「日本は山が多い」などは、外国人から見ると二重主語に感じられることがあると池上は言う。「ハ」が主題、場所を設定するという前提にたち、「日本は山が多い」を語感のままに英語に対応させれば 'As for Japan [In Japan], there are many mountains.' となる。さらに、池上は芭蕉の「古池や蛙とびこむ水の音」「閑かさや岩にしみいる蟬の声」などは、「ハ」が「ヤ」に変わっているが、やはり提示部で、場所の設定を行っている、という。そして「日本語では、〈主題化〉というのが基本的な操作のひとつであり、しかも〈主題〉とされた項は〈場所〉的な意味合いを帯びる。」と指摘する。

この説に従えば、①で出した「私は、このような問題に関して…」の例の、「私は」ないし「私は……に関して」という部分は、これから話す主題部分、場所の設定であり「A氏は、恒例ですが…」の例も、「A氏は」と述べて、A氏という主題を提示し、その後、日本人の「点的論理」によって論理が飛躍したのだ、と考えれば納得が行く。

私の知るかぎり、このことを問題点として指摘した人は皆無であるが、日英同時通訳の現場で、speaker が何を言うか先が読めない場合、しばしば障害となりうる重大問題である。この問題解決法については、後ほど詳しく考察するが、このような助詞「ハ」を伴うことの多い冒頭の「主題提示」は、retention（すぐには訳さないでおく）ないし、副詞句として訳すことによって処理することができる、と考えられる。

③語順 (word order) の相違による問題

日本語がSOV言語であるのに対して、英語がSVO言語であることは、日英同時通訳の際の最大の障害と言ってもよい。speechの日英同時通訳では、通訳者が日本語の動詞が出るまでじっと黙って待っているわけにはいかないことも多い。この問題は、SOV言語

改めて、国政の遂行に全力を傾けていく 決意である、
all, I should like to say that I will do my
この言葉から始めたいと 思います。
best for Japan and start out my speech by declaring this.
で、今回のAPECの出席を通じて、私は、 アジア太
(イ) My participation in the APEC meeting,
平洋における、 ま、自由で開かれた そして活力ある社会の創造に向けた
through this (ウ) I felt that a free
躍動というものを、ま自分の肌で感じながら この地域が新しい時代に
society in APEC, I felt the need for this personally
入りつつある そうした認識を 改めて強く感じました。ま、よ
and felt that we are entering a new era.
り自由で開かれたアジア太平洋、 そして世界の中で、 ま、友人たちと
(イ) A freer and more open Asia-Pacific and in the world,
共に21世紀の世界を創っていきたい、 (ウ) そのように考えています。
with our friends creating a new 21 century,
わが国もまた、 21世紀を目前に控えて、ま、大
that is what I would like to do. Our nation, facing
きな転換期を 迎えており、 政治・行政・経済・社会、
the 21 century, is also facing a large time of change in
すべてにわたっての変革と創造を やり遂げなければなりません。
politics, in administration, in economy, in everything, we need
ま、わが国の現状を真正面から見据え、
to come across reform. (カ) Looking at the current situation of
また世界の諸国と共通の基盤に立ちながら、 ま、ともに発展して
our nation, (キ) we need to face this and stand on a common
いくことのできるシステム、 そのような21世紀にふさわし
foundation with all the other nations and create a
い 社会経済システムの 構築に向けて
system where we can cooperate together towards the 21 century to create
ま、私は、行政改革、 経済構造改革、金融システム改革、
a new social and economic structure. (ク) I would like to carry out
財政構造改革、そして社会保障構造改革の5つの改革に真正面から取り組
various forms of reform.
んでいきます。 私は今回の
(ケ) I plan to deal with 5 types of reform in a straightforward manner.
APEC非公式首脳会議においても、 今申し上げたような、
And even at the unofficial meetings at APEC,
わが国の変革と創造に向けた私自身の基本的な考え方にに基づきながら、 まず、
(コ) targeting changes for our nation, based on

自分としてはできるだけ積極的に発言や提案を行ってきました。

fundamental strategies, I would like to be as aggressive as possible, and I've tried to speak out as much as possible.

についての評価を一言申し上げますと、 ま、今回の会合は

(㉞) Regarding the APEC Philippine meeting,

アジア太平洋コミュニティーの形成という理念の

I would like to say that this meeting, for the formation of the Asia-Pacific community, ever since 94年の

94年の ボゴールにおける目標、 95年日本が議長国

the vision in Seattle in 1993, and in Bogor in 1994, and in

としてまとめた大阪での指針というものを受けて、いよいよ、行動の段階への移行を

1995 in Japan in Osaka, (㉟) these plans

きちんと位置付ける、 ま、節目と

have now reached a stage where they are...they should be put into

なる大変有意義な会議でありました。

action. (㊱) So this meeting in the Philippines was

ま、閣僚会議におきましても、まさに行動元年にふさわしい、ま、立派な成果が得

extremely fruitful.

られた、とそうように思います。 一方、

And the meetings among the summit leaders were also very fruitful.

非公式首脳会議においてはアジア太平洋コミュニティーの形成、

And (㊲) regarding the unofficial meetings amid the

グローバル化、 (㊳) APECプロセスの

Asia-Pacific community, the formation of this community and

ダイナミズムの持続、 ま、インフラ開発という

globalization and the dynamism and the

4つの、 ま、大きなテーマが話し合われました。

continuation of APEC and the creation of the infrastructures.

(㊴) ま、APECというものの特徴が、

These were themes that we discussed.

多様であり、 (㊵) かつ異なる文化を持った太平洋をまたがるメンバーの中

A characteristic of APEC is that it's very...it has a wide variety of countries

で、 ま、開かれた精神を持ってさまざまな問題について

that surround the Pacific.

議論し (㊶) 協力していく その点にあることは皆さんもご承知のとおりですが

And it has an open mind

(㊷) ま、今回のこれらのテーマは、まさにこうした

and everyone is aware of this openness. And I believe

A P E Cのプロセスを より活発で開かれたものにしていこうというものでした。
that the themes we discussed will help to make

ま、私自身もその議論に 加わってきたわけですが、
APEC even more prosperous. And I myself have
具体的に申しますと、 まず、 コミュニティ精神の
participated in these debates, but touch on specific issues, first of all,
重要性を訴えて、 これを深めるという観点から、

(ト) the importance of a co...spirit of community and deepening this.
ま、コミュニケーションの発達を期して、 (ニ) 情報技術関連の
(ナ) To do this, we need to deepen communication
関税の撤廃、 I T Aの推進を強く主張すると共に、 神戸に開
and lower tariffs on information-communication equipment
設を予定して、 すでに進めているアジア太平洋通信基盤センターを
and to promote the ITA.

他のメンバーも 活用するように提案をしました。 これは
(ヌ) And we also need to allow other APEC members to participate
大震災によって 非常に大きな被害を受けた神戸が 着実に 復興しつつ
in a special center. Kobe, which suffered drasti-
ある ものを 示す姿としても 大事なことだと そのような意義も
cally because of the earthquake, is now recovering steadily. And I believe
つけ加えて訴えています。次に、グローバル化
this is a chance to show this.

に対応していくという観点から、 直接投資の促進の 重要性を
(ネ) Next is about the globalization. Er, for promotion of glob-
訴えました。 また、インフラの関係では、 この地域におけるインフ
alization, we... I have advocated for the impor-
ラ整備のための 民間資金活用を 促進すべく、 ま、貿易保
tance of the direct investment and also the importance of the
険機関の協力を打ち出す一方で、 インフラ関連の 情報
mobilization of a private sector capital in the infra-
交 換 を インターネットを利用して行う、 インフラ情報ネットワー
struture building and the use of the, er,
の設立などを 提唱してきました。 A P E Cプロセスの 一層の活発化のために
trade insurance agency. I also advocated for the use of, er,
は、ま、A P E Cの活動への民間の関与の必要性というものを主張すると同時に、
information system. And

太平洋を囲む我々ですから、 その太平洋の海洋 環境保全のために
also I said that since we are countires in the
(ノ) 地球観測衛星の活用、あるいは、サンゴ礁保全に関する協力等を提唱
Pacific, we need to work for the maintainance of, and conservation

しました。(ハ)すでに、日米のコモンアジェンダの中で、このサンゴ礁に関する協力は of the environment, and also the use of satellite for this purposes スタートをしています。

can be promoted. Er, we have already started, there
さらに、麻薬や銃器の不正取り引きなどは
are cooperations with the United States about the protection of the reefs,
の防止など、国境を越えた、社会・経済的な問題についても 今後

coral reefs, and also about the global issues
話し合っていくべき問題だということを、私から提起しました。ま、この機会

including the drug traffic prevention. I suggested that we
を借りて、議長として大変見事な采配を振るわれた、そして会議を成功に
need to cooperate amongst ourselves in this area. And the

導かれたラモス大統領、並びにこの準備に当たってこられた、フィリピン政府を初
chairman of this meeting, (ヒ) President Ramos of the Philippines
め多くのフィリピンの関係者に対し、私は改めて敬意を表したいと思います。

should be praised and also his staff should be
ま、さらに私は首脳会議に先立ちまして、APECの議長国で
praised for their work, excellent work for organizing this meeting.

であるフィリピンを初め、韓国・米国・中国との間でそれぞれ

And before this summit meeting, I met the leaders
首脳会談を行いました。フィリピン・韓国・米国の首
of the Philippines, the Philippi...China as well as the United States.

脳は それぞれすでに 旧知の間柄で ありますし

And all these leaders, of course I know them very well
ま、中国の江沢民首席とは、ま、日中両国の首脳という立場では初めての
since some time ago, and (7) Mr. Jiang Zemin of China,

会談でしたが、いずれも極めて有意義であり、かつ建設的な
of course, it was the first meeting for us as the leaders of Japan and

会談を行い得たと 思っています。ま、大変簡単ですが、
China but our meeting has been quite constructive and

以上が 今回の APEC フィリピン会合を出席を終えての私
meaningful. With this, though it is short, (ハ) I'd like to
の感想です。

conclude my impression about this meeting for the APEC. ³⁾

IV. 処理のパターン

II で唱えた問題点を解決、処理するパターンとして、筆者は実例から次の4つに収斂した。⁴⁾

- ①文頭を副詞的に処理。
- ②retention する。
- ③- a anticipationにより、動詞を先取りする。
 - b 原文を分割し、短文を作る。
- ④- a 名詞、～ing の形でとりあえず訳出し、後にthis、thatで受ける。
 - b ～ing の形でとりあえず訳出し、SVを続ける（分詞構文）。

次に、それぞれのパターンについて解説を加えながら実例を分類し、実例に対しても解説を加えたい。（なお、生同通のため、実例には文法及び慣用上の誤りが多く見られるがここでは問わない事とする。）

①②は、日本語の論理構造の違いや助詞「ハ」に対する対処法である。

(ア)では、「今日は」に対して、すぐに'Today' と出したため、「今日」が11月7日のように聞こえるが、もちろんこれは11月25日のspeechである。「今日は」はいわば場所の設定であるが、すぐに訳してしまったために誤訳となった。あえて、①に則して副詞的に処理すれば、'in connection with today'とでもするところであるが、さすがにこれは英語としておかしいので、retentionしておくしかない(②の処理)。(セ)は文頭の「非首脳国会議においては」を①のパターンで'regarding the unofficial meetings'と訳した例。(フ)は「中国の江沢民首席とは」を副詞的処理をせず'Mr. Jiang Zemin of China'と名詞句で出したためにこの部分が浮いてしまった。少しぎこちないが、①に従い'regarding Mr. Jiang Zemin of China'とでもするところ。

③- a、bは、最後に動詞が来る日本語のSOVの構造に、通訳者は常につきあってはられないので、予測して先に英語の動詞を出す、ないしは短文に分割する試み。SOVの構造を英語のSVO構造に近づける試みといってもよいかもしれない。

(イ)は「今回のAPEC出席を通じて」を名詞句で出してしまう失敗している。③- bのパターンに従い、短文を作り'I participated in the APEC meeting where...'とすれば安全に捌けたと思われる。(ウ)は③- aのパターンで動詞を先取りしようとしたのだが、失敗してしまった例。(キ)(ニ)(ヌ)は動詞の先取りの成功例(③- aであるが、③- bとも取れる)。(ク)(ケ)(ス)(チ)(ツ)(テ)(ネ)は長い文をうまく分割した③- bの例である。(サ)は'Regarding the APEC Philippine meeting'と副詞的に通訳者は処理しているが、③- bの処理で短文を作り、'Now I would like to mention my impression of the APEC Philippine meeting'とする無難な処理もあった。なお最後の、(ヘ)は、speechがもう終わると見て、'I'd like to conclude...'と始めた通訳者の的確な判断による動詞の先取り例である(③- a)。

④- a、bは、主語の直後に動詞が来る英語のSVOの構造に逆らい、できるだけ、英文の動詞を保留し、後ろに持ってこようという試み。③- a、bとは逆に、SVO構造をSOV構造に近づけようとした試みと言える。

(エ)(オ)はあまりうまい訳とは言い難いが、(エ)で名詞句'A free and more Asian Pacific'、(オ)では動名詞'creating' ととりあえず訳出しておき、次の行で

'that is what I would like to do.' とうまくまとめている(④-a)。(ト)も同様に名詞、動名詞と続け、これを(ナ)で'To do this'と受けてまとめた。(ソ)(タ)は名詞、名詞、名詞...と続けて動詞を保留し、最後にtheseで受けた④-aのひとつの典型的パターン。(シ)も前出の名詞をthese plansで受けた同例。(カ)は、とりあえず～ingで始めて、動詞を後出する(キ)、いわゆる分詞構文(④-bの例)。(コ)も同様の例である。

最後に、paraphrasing訓練の効果が現れている(と思われる)部分として(ハ)(ヒ)を挙げたい。(ヒ)では「... ラモス大統領... に対して改めて敬意を表したいと思えます」に対する、会議通訳の普通の表現は、'I would like to express my gratitude to President Ramos'あたりであろう。通訳者はここですぐにanticipationにより、'I would like to express...'と始めることもできたはずである(③-aの処理)。しかし安全策を取って(「点的論理」により途中で話題が変わる恐れもあるから)この通訳者は'...President Ramos...'を主語として切り出し、次に'should be praised...'とうまくまとめた。英語としても上々であろう。このあたりの処理は、paraphrasing訓練の成果が出ているように思われるのだが、いかがだろうか。⁽⁶⁾

V. 終わりに

本論では、日英同時通訳の際の主要な障害として、3つの問題を取り上げ、その処理パターンを実例に即して4つに収斂し、考察を行った。その際に感じたことは、普段我々が何気なく使っている日本語の難しさである。そして、日本語を徹底的に分析しなければ、日英同時通訳のプロセスの解明は不可能だということである。筆者が、日→英の同時通訳プロセスの研究を進めるにあたって、その大半が、実は日本語文法の研究になってしまったのだが、これは意外だった。初めは、英語主体の研究をしようと思っていたのだが、実は日本語の研究をしていた、いやせざるを得なくなっていたのである。はからずも、外国語の研究→本国語の研究、という図式になってしまっていた。外国語の勉強は、本国語への注意を促し、本国語を客観的に見直す意味があると言われた先学がいたが、この言葉を改めて実感した次第である。

最後に、本論の研究姿勢について一言申し添えたい。筆者は、小倉(1997)において、現場と理論の表裏一体性を唱えたが、同時通訳は、技術面においてある意味でスポーツと相通じるところがあるのではないかと思う。筆者自身スポーツの専門家ではないが、スポーツの世界では、スポーツ理論が競技者の能力を向上させ、優れた競技者の研究や実態の研究によりますますスポーツ理論が盛んになる、と言う図式が好ましいのではあるまいか。筆者は、直接実用に即しない基礎研究の重要性を否定するわけではないが、例えばオリンピックに出ようというスキー・ジャンパーが、スポーツ理論を研究しても、また研究者に助言を求めても、技術の向上にほとんどつながらなかったら、何の為のスポーツ理論であろうか。同じように、現場の第一線で活躍する同時通訳者が見向きもしないような(何の参考にもならないような)同時通訳論を書く、あるいは書き続けることにどれだけの意味があるのだろうか。本論は、その意味で、研究論文でありながら、理論研究者のみならず同時通訳者を志す人にとっても、意味のあるもの、役立つものになることを念頭に置いて

て執筆したものである。

[注]

本稿は、1997年10月10日日本英語コミュニケーション学会第6回年次大会（於、早稲田大学）で発表した内容を推敲、再構成したものである。なお、本稿の執筆にあたっては、大阪府立大学総合科学部教授、船山仲他先生より一部貴重な助言を頂き、またtranscriptの作成にあたっては、畏友公子ピーターズ氏に協力を頂いた。付して、謝意を表したい。

1) 自らの会議通訳例を論文に掲載している著者もいるが、これは通常clientやagentの了解無しですることは、職業倫理上問題がある考えられる。また、通訳学校の生徒を使っての実例掲載例もあるが、これは現場の実例と言えるかどうか疑問である。

2) たまたま、この記者会見が7時のニュース枠（二か国放送）の時間帯にリアルタイムで行われたために、日英の同時通訳が行われることになった。もし、この記者会見が午後7～8時の間に行われなければ、二か国語ではなく、日本語のみで放送されたであろう。

3) ビデオで見るとかぎりでは、橋本首相は草稿ないしは、メモのようなものをもとに、下に目をやりながらスピーチをしている。この種の通訳で、通訳者に原稿が手に入らない場合極めて困難な同時通訳となることは、想像に難くない。このことは、通訳者のために申し添えたいと思う。なお、紙数の関係で扱えないが、この後質疑応答が20分ほど続く。この質疑応答の部分では、二人の通訳者は、極めてレベルの高いperformanceを見せたことも付け加えておきたい。

4) このパターンは、Nishio(1986)、水野(1995)等の先行研究を参考にしているが、全体としては筆者のオリジナルなものである。もちろん、研究の方向性により、これ以外のパターン、考え方も数多くありえよう。例えば、水野(1995)では、日英同時通訳のためのマクロな方略として、①副詞的に処理できる語句を除いて訳出をできるだけ、あるいは述部まで遅らせ、各項の文法的地位をはっきりさせる②主語、動詞句、従属関係などを予測して訳出する③暫定的に短文として訳出し、その後の展開に合わせて補足・修正する形で訳をつなぐ、の3つを挙げている。

5) この記者会見は、二人の通訳者が同時通訳を行っている。前半の通訳者は、発音がnative English speakerに近い（おそらく海外滞在は長い）が、同時通訳の訓練は十分に受けていないと思われ、後半の通訳者は、発音は日本的だが手慣れた処理を随所で見せ、日本での訓練を十分に積んだと推測される。ちなみにこの部分は、後者の通訳者の担当部分である。

[参考および引用文献]

池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店

小倉慶郎 (1997) 「英日同時通訳の問題点 — 技術的側面から」 The JASEC Bulletin

第6巻1号日本英語コミュニケーション学会

- 船山仲他 (1985) 「同時通訳の諸側面」『視聴覚外国語教育研究』第8号
- 船山仲他 (1996) 「同時通訳教育の理論的基礎」『研究報告』日本時事英語学会関西支部
同時通訳論研究分科会
- 船山仲他 (1997) 「同時通訳と認知言語学」『言語』8月号第26巻第9号
- 久野暲 (1973) 「日本文法研究」大修館書店
- 外山滋比古 (1973) 『日本語の論理』中央公論社
- 三浦信孝 (1997) 「通訳理論から外国語教授法へ」『言語』8月号第26巻第9号
- 水野的 (1995) 「日英同時通訳研究ノート」『通訳理論研究』第9号通訳理論研究会
- 日本通訳協会・編 (1976) 『通訳教本・英語通訳の道』大修館書店
- Nishio, Michiko (1986) "A Brief Introduction to the Mechanics of Simultaneous
Interpreting with Special Reference to Japanese-English Interpretation."
The Language Teacher, Vol.10 No.2, 4-12